

未熟卵子体外受精胚移植法 (IVM-IVF) による出生児の長期予後調査結果

樽井 幸与¹, 中西 麻実², 三村 結香¹, 加部 杏子¹, 境 眞実¹, 水野 里志¹, 福田 愛作¹,
森本 義晴²

¹IVF 大阪クリニック ²HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

当院では、1999 年に日本国内で初めて未熟卵体外受精胚移植法 (IVM-IVF) による妊娠・出産に成功して以来、主に多嚢胞性卵巣症例に対し卵巣過剰刺激症候群を回避する目的で実施してきた。また、IVM は近年ではがん患者における妊孕性温存目的の有用な選択肢としても期待されている。今回、当院での IVM-IVF により出生した児の 5 歳までの予後調査結果より IVM-IVF についての安全性を検証した。

【対象と方法】

1999 年から 2021 年の間に IVM-IVF を実施し妊娠出産に至った 158 児のうち、単胎出産であった 132 児（新鮮胚移植男児 31 児、女児 38 児、および凍結融解胚移植男児 33 児、女児 30 児）を対象とした。新鮮胚移植と融解胚移植それぞれにおいて、出生時体重、1 歳、3 歳、5 歳時点での体重を男女に分けて厚生労働省の乳幼児身体発育曲線（パーセンタイル曲線）と比較をおこなった。また、先天異常率について日本産婦人科医会先天異常モニタリングデータと比較した。

【結果】

出生時体重の平均値は、新鮮胚移植男児と女児でそれぞれ $3.220 \pm 0.42\text{kg}$ 、 $3.186 \pm 0.52\text{kg}$ でありパーセンタイル曲線の 50-75%、75-90% に位置しており、融解胚移植男児と女児ではそれぞれ $2.986 \pm 0.75\text{kg}$ 、 $2.847 \pm 0.467\text{kg}$ であり、ともにパーセンタイル曲線の 25-50% に位置していた。新鮮胚移植女児の 3 歳時平均体重が 75-90% に位置していたが、その他の調査点での平均体重はパーセンタイル曲線の 25-75% に位置していた。また、先天異常率は 3.7% であり日本産婦人科医会先天異常モニタリングデータによる先天異常率 3.3% と比し差はなかった。

【考察】

出生時から 5 歳までの児の体重および先天奇形率において国内出生児平均値と差がなかったことより、IVM-IVF は安全な治療であることが示された。今後も症例を増やして分析をしていきたい。